

●佳作

一人一人の思いを大切にしたい 社会科における福祉教育の実践

神奈川県秦野市立鶴巻小学校 やじまよしかず
矢嶋良和

1 はじめに

(1) 主題設定の理由

「この前温泉病院へ行って入院されているお年寄りの前で歌を歌ったら、とっても喜んでくれたから、私もうれしくなっちゃった。」

これは、交流委員会で活躍しているクラスの子どもたちの、帰りの会での報告である。この活動に行く前には、あまり乗り気でなかった子どもたちもいたが、終わってからは、活動に対して充実感あふれるばかりの笑みで、帰りの会に参加していた。それは、お互いの心と気持ちが通い合ったという実感が、肌で感じとれたからである。

核家族化の進む社会の中で生活している子どもたちにとって、人生の先輩であるお年寄りと触れ合う機会は、それほど多くはない。しかし、あの悲惨な戦争を体験し、今の私たちを守り育ててきたお年寄りに対して、敬意を忘れてはいけない。

町には障害者やお年寄りの方に配慮した設備や施設が目につくようになった。例えばシルバーシート、高齢者マーク、駅などにあるエレベーターやエスカレーター等々。

たしかに、これらは障害者やお年寄りの方に対してのいたわりや思いやりであろう。言葉で代えれば、人と物とでの触れ合いである。

だが、もっと大切なことは、一人一人がお互いに他の人格を尊重し、立場や心情を深く思いやっていく心を育てることである。

そこで、この思いやりの心を育てることを

福祉教育ととらえ、政治単位を通して実践に取り組むことにした。

(2) 児童理解に基づく単元構想

子ども一人一人は、それぞれ異なった環境の中で生まれ育っている。社会的事象を考える時、その見方・考え方は多様である。その個の考え方の背景にあるものを少しでも理解したうえで授業に取り組めば、個が生き、お互いの考えを深め合うことができる。そこで、子どもの認識や思考の流れに即した単元の構想に心がけた。

(3) 人間の生き方に触れる体験的活動

ここでは、特に聞き取り調査を中心に進めた。取材を行うことによって、学習対象である人間の立場や心情に共感的に迫り、人間の生き方について考えることができる。

2 研究内容

単元名「一人一人を大切にする政治」

(1) 子どもの実態と単元設定の趣旨

クラス36名の中で祖父母と同居している家族は10名である。子どもにとって老人が身近な存在である反面、実はその生活が、子どもたちにとっては気づかないあるいは分からないものになっているようである。まして、盆と正月ぐらいにしか田舎の祖父母と逢えない子どもにとっては、お小遣いをくれる優しいおばあちゃんの印象が強く、生活の実態まで

は見えないのが当然である。

そこで、子どもたち一人一人が自分の祖父母や身近なお年寄りの生活について調べる活動をすることによって、今まで気づかなかった事実や事象に触れることができると考えた。例えば、病気で苦しんでいる老人からは通院医療についてを、独居老人の生活からは行政の役割を理解できると同時に、ボランティアなどの福祉活動にも目を向けることができるであろう。また健康な老人からは、ゲートボールや旅行などで日々の生活に生きがいを感じている姿に気づくこともできるであろう。

このように、祖父母や身近な高齢者の生活が基本的人権によって守られていることを通して、国民の健康や生活は国が保障していることを学習していきたい。そしてその中で、子どもたちがだれに対しても思いやりの心を持って、具体的な行動を見つけだしてくれたらと願うものである。

(2) 単元目標

政治は国民一人一人の健康や生活などの基本的人権を守るために、さまざまなはたらきをしていることを理解する。

(3) この単元での福祉教育の考え方

老人医療の無料化、寝たきりや独居老人の給食・電話、訪問ケア、在宅介護支援センターなど、高齢者に対する国・県・市の行政のはたらきを学習していく中で、子ども一人一人が高齢者に対して思いやりの心を持って実践できるようになることをめざす。

3 授業の実践

(1) 第1時 老人人口は日本が世界第1位

日本が老人人口世界第1位（2000年推定）のグラフを提示し、子どもたちの驚きから高齢者問題への意識を高め、その生活の実態に迫るための導入とした。

このグラフを見て、「第一次、第二次ベビーブームでお年寄りが増えたのが原因だ。」「戦争中は死んだ人が多かったが、それからは平和になったから。」と歴史的見方で考えたM子やK男。「医学が進歩して病気が治せるし、医療費が無料だから長生きできる。」と社会制度の利点を考えたN子とH男。「食生活がよくなって栄養が十分とれている。」と自分の豊かな日常生活を思い浮かべながら考えたO男やL男。「一人暮らしのお年寄りなどをボランティアでお世話してお年寄りを大切にしているから。」「老人ホームを作ってお年寄りをいたわってあげている。」と福祉的な見方でとらえているY男、I子、R子。単に「長生きをしているから」という意見ではなく、幅広く考える子どもが目立ってきた。

この「世界第1位」のグラフが子どもたちに与えたインパクトは大きかった。いろいろな子どもたちの見方は、お互いに刺激を与え、思考に広がりが生まれてきた。そして、祖父母はどんな暮らしをしているのだろう、調べてみたいという意欲が高まってきた。そこで次の学習の時までに、祖父母などのお年寄りが今どのように生活されているのかについて、各家庭で聞き取り調査をしてくることを話し合った。

(2) 第2時 お年寄りが不安に思っていることは何だろう

家庭での聞き取り調査や自分の経験、テレビなどでの報道などに基づいて、お年寄りにとって楽しいことや、困っていること、不安だと思われることを発表させた。

楽しいこととしては、子育てや労働から解放されて、趣味を楽しんだり、仲間と気楽に旅行したり、孫の相手をしたりすることなどが挙げられた。

一方、不安なこととしては、自分の経験から健康面や身体面での不安を感じている子どもが多かった中で、「物価が上がっておじい

ちゃんのもらえる年金が減ってしまう。」と、経済面で考えたP男や、「地震や火事になった時、逃げ遅れたらどうしようと思う。」と災害時の事を考えたH男のような子どももいた。しかし、「病気になった時や、身体が不自由になった時に、世話してくれる人がいなかったりして、不安を感じるだろう。」と考える子どもが最も多かった。

その中でもA子は、「重い病気などで自分のことができなくなったら、だれが世話をしてくれるのだろう。家族が自分の会えない所へ行ってしまうのではないか。」と同居している祖父（足が少し不自由で通院している）を思い浮かべながら、切実な問題をクラスに投げかけた。

(3) 第3時 病気のお年寄りの介護はだれがするのだろう

本時は、前時にA子が問題提起したことについて話し合った。

この時間は、今までと違って子どもたちの思考が深まらず、低迷した。その原因の一つは、祖父母との同居家庭が少なく、家族に実際の介護の経験がないために、子どもたちの思考が観念的になってしまったことである。多くの子どもたちは、「お母さんがお世話すればいい。」「家族がみればいい。」と、介護が簡単なことのように思っていた。たしかに、自分の身内が病気になれば、家族で介護するのは当たり前ではある。しかし、子どもたちの話の端々からは、切実さが感じとれなかった。

そこで、「もしお父さんがお年寄りのお世話をするならば、仕事を休むか辞めなければならぬことだよ。それでいいの。」と揺さぶると、「それは困る。お父さんが仕事を辞めたら、生活できなくなる。」との声が多くなった。W子は思い出したように、「うちのおばあちゃんが病気の時、お母さんが介護した。それはお母さんが働いていないからで

資料1 介護の模擬体験



きたと思う。でも、とっても疲れたって言っていた。」と、専業主婦でも大変だった母の話をしてくれた。

低迷した原因の二つ目は、「介護する」という意味がはっきりと子どもにイメージできなかったことにあった。子どもたちの「介護」のとらえ方は、自分たちが風邪などで1～2日寝込んだ時に、母親が子どもを「看病する」程度の認識であった。これを崩すために、指導計画を修正して、簡単な「介護ごっこ」を1単位時間取り入れることにした。

(4) 第4時 介護の模擬体験をしてみよう

寝たきりの人を起こしてトイレに連れていくことを想定して、実際に子どもどうして、一人が寝たきりのお年寄り、もう一人が介護する人という役割で全員に体験をさせた（資料1）。この活動によって、B子は「お年寄りのお世話って簡単じゃんと思っていたけど、やってみるととても大変で難しかった。毎日やる事なんてできないと思う。」と発言した。C子は「私の母もよくおばあちゃんをお風呂に入れる。私はそれを楽しそうに見ていたけれど、本当はすごく大変だということが分かった。」などと介護のイメージを身体でとらえ、その大変さを実感することができた。

病気のお年寄りの介護をだれがするかで、子どもたちの意識に「大変さ」だけが残ってしまった状況になった時、E子が「世話をす

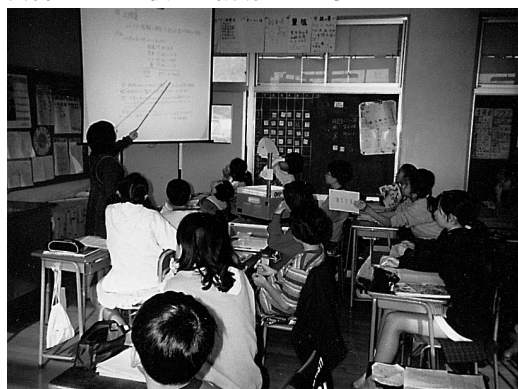
るのがどれぐらい大変かは分かった。仕事のある家族はとても世話できないから、病気になったら入院させたほうがいい。かわいそうかもしれないが、お年寄りのためならしかたがない。」と病院に頼ることを考え出した。数年前にマンションを購入したE子の家庭は両親共働きで、どちらかが仕事を辞めれば、経済的に苦しくなることを知っているE子の切実な思いであった。

それに同調して、身体の不自由な祖父を介護する母親の苦労を見ているL男は、「老人ホームが近くにあれば、母が苦労しなくてもよかったのに。」と発言した。彼の祖父は長年寝たきりの状態で、彼が5年生の秋に亡くなった。辛い心境で話してくれたことに感謝し、子どもたちからも自然と拍手が起こった。

資料2 1か月にかかる入院医療費

病院に1か月入院したら いくら？	
(65才男性)	
↑ リハビリでの入院	
部屋代	10万～10万5千円
食事代	2万～3万5千円
薬品代	1万～1万以上
+ その他	5000円以下
15万5000円～15万以上	

資料3 TPを使って説明するM子



そこで、次時はE子らの思いを学習問題として、自分の考えをはっきり持たせるために、地域の人たちに聞き取り調査をすることにして、本時の学習指導を終えた。

(5) 第5時 しっかりとした介護の入院か、 気持ちが安らぐ家か

聞き取り調査をもとに、子どもたちにそれぞれの立場（入院か、家か）を明らかにさせた。36名中、入院のほうがいい21名、家のほうがいい15名であった。「入院派」の意見は、主に専門医、食事の面、設備・施設の面などで安心して介護が受けられるという理由であった。また、精神的・肉体的にも、介護する家族を疲れさせてしまうから、家族に迷惑をかけられないなどの意見が多く出た。「家派」の意見は、お年寄りの気持ちが落ち着く、家族に甘えられる、家族も毎日顔が見られて安心できるなど、どちらかという精神的に家族がケアできることが理由であった。

ここで一つ気になったのが「入院派」の考え方であった。Y男やS子は、「自分だったら家で介護してもらいたいけど、もしおじいちゃんの身体が不自由だったら、家族に迷惑かけるから。」と前置きして発言していることである。子どもの心の中はかなり葛藤があったものと思われた。まだ親に甘えたい年ごろの子どもたちには、その時期に親もとを離れること自体考えられないことにちがいない。しかし、前時の模擬体験活動によって、介護する側にとっては大変な負担になることを感じとったことと、家族への聞き取り調査の結果が心の葛藤となって、前述のような言い方になってしまい、自分の結論として「入院したほうがいい。」との立場をとったと思われる。

話し合いはどちらかと言うと「入院派」のペースで進んでいたが、「家派」のM子が、「1か月にかかる入院医療費」を根拠に反論してきた（資料2, 3）。M子は駅前で道行く

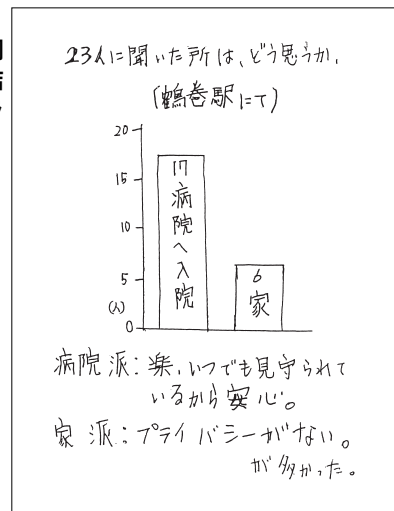
人たちに聞き取り調査をして、最初は彼女自身の考えもアンケートの結果(資料4)と同じ「入院派」であったようだ。しかし、精神的な面ばかりの結果に物足りず、医療費を調べる事を思いつき、調査対象のお年寄り一人が入院することによって生じる家庭の経済的な負担の大きさに着目したようだ。

月に15万円以上の医療費がかかることに「入院派」は大きな驚きを受けた。つまり「高度な医療、施設・設備＝安心介護」と考えていたものが、「安心介護＝高額な医療費」と思考が結びついて、「入院派」が悩み始めてきた。そんな時、「入院派」のA子が「おじいちゃんがもし病気になって歩けないようになれば、当然家族が愛情を込めてお世話をすればいいと最初は思っていた。しかし、これが毎日続くとなると、家族みんなが疲れて病気になるってしまう。また、家族みんなで旅行しようと計画しても、おじいちゃんのことを思うと行けないから、何でいるんだろうと邪魔にになってしまうかもしれない。だから、お金はかかるかもしれないけれど、やっぱり入院したほうが私はいいと思う。」と、理想と現実のギャップに悩む彼女の苦しい心情を吐き出した。A子は喘息で夜中にせき込んで緊急入院した経験が幾度もある。いつも屈託のない明るさを持っているA子であるが、自分が家族に迷惑をかけた経験が、この考え方を生み出したのかもしれない。

話し合いは進んだが、子どもたちは双方の立場が理解でき、どちらがいいという判断はできなくなってきた。Y男やS子の考えのように家で介護するのがお年寄りにとってはいちばんいい。しかし、家族の疲労や入院の経済的負担が大きい。この問題が解決するのなら、お年寄りにとってはいちばんいい方向へ進むのではないかということである。

そこで、「在宅介護支援センター」が温泉病院内に市の委託を受けて設置されていることを紹介し、その事業内容の資料を与えた。

資料4
駅前で調査した結果のグラフ



このセンターの存在を知ることにより、市の行政が自分たちの身近なところにまで手助けをしていることに、驚きと喜びを感じていた。

次に、高齢者の医療費の無料化も資料として提示し、M子の作ってきた入院医療費は、一部負担が軽減されることを補足した。

お年寄りが望むいちばんいい方向へと問題が解決されたことにより、子どもたちの「安心」した顔を見ることができた。

(6) 第6時 今、わたしたちがお年寄りにできることって何だろう

お年寄りにとっての基本的な人権とは何かを考えさせるねらいをもって学習にのぞんだが、前時の「入院か、家か」の余韻が強すぎて、出てくる意見は広がりをもてなかった。学習問題が子どもの思考と離れたものになり、前時の学習の流れが切れてしまった。在宅介護支援センターから派遣されるホームヘルパーの話を取り入れ、そこを切り口に「お年寄りが悩みなく、安心して暮らせる社会を作るにはどうしたらよいだろうか。」と投げかけたほうが、子どもたちの思考が前時とかかわりを持てたのではないかと思った。

この単元の終わりに「今、わたしたちがお年寄りにできることは、どんなことだろう。」

と子どもたちに尋ねてみた。第5時に「邪魔になるかも。」と悩んでいたA子は、「今までより少しでも多く祖父と一緒に食事したり、遊んだりしたい。」と書いていた。医療費を調べたM子は、「ボランティア活動をしてお年寄りを楽しませる。」と張り切っていた。早速、M子はボランティアグループに入り、独居老人の家に行って人形劇や会話相手をするなどして、実際に活動している。それをみんなの前で紹介すると、「すごい。」と感嘆の声が聞こえた。

中には、ちょっと現実離れた内容もあったが、W子はM子の行動に敬服しながらも、自分なりにいつでも気楽にできる挨拶を笑顔

資料5 W子が考えた「できること」

庄司さんのようにできたらいいけど、やっぱり私にそんなことは無理そうです。
だったら、うんと身近なことでいいけど、前の勉強のときに誰かが「お年寄りは子供が好きみたい」と言ったから、例えば道ですれ違ったお年寄りに（知らない人でも）「今日は」とか笑って言えばきっとお年寄りも「今日は」と言ってくれると思う。

資料6 S子の班日記の一部

今日の二時間目の時の社会の授業で発言した事のとて帰って来る時にちょうど「鶴巻温泉の車」がひかりの丘に入って来て、ちょっと見てみると、老人専用の様な車で、車のうしろには車いすのマークがついていました。しばらく見ていると、車を運転している人と助手席の人がおりて来て、助手席の人は女の人でかん護ふさんでした。すると、うしろの方から老人の人の女の人が女のかん護ふさんに助けてもらいながら車をおりて来て、そのまま家まで送っていたのを見ました。この授業でやっていなかったらそんなの目にとまっていなかったと思うので少し得したような気がしました。

ですることを書いていた（資料5）。そのほか、独居老人の家に励ましの電話を時々かける、あるいは横断歩道を渡ろうとしているお年寄りを見たら手をとって一緒に渡るなど、小さなことであるが楽しく実践していくことを「合い言葉」に、単元を終えた。

4 研究の成果と課題

(1) 研究の成果

① S子の日記から

資料6は、この単元が終わった数日後のS子の班日記である。S子は第5時の学習では「自分だったら家で介護してもらいたいが。」と「入院派」として苦悩しながらも、病院での治療を最後まで自分の意見として通していた子どもである。実際に自分の目で「在宅介護支援センター」の仕事の一部を、しかも自分の家のすぐそばで見たことにより、市の行政のはたらきをより身近に感じたことであろう。そしてこの「得したこと」が一つの契機となって、S子の視野が広がっていくことが期待される。

② 授業の場から

第5時は「入院か、家か」と二つの立場で話し合いが進んだ。この場を構成できたことにより、個が自分の考えをはっきり持つことができた。当初は対立していた意見が、お互いの考えを話し合い、認め合う中で、家族もお年寄りも安心できる介護の方法へ収束していったことに、子どもたちの思考の深まりを感じることができた。また、一人一人が自分の祖父母の生活の実態や家庭の経済状態など、それぞれの置かれている家庭環境を思い浮かべながら自分の思いや悩みを話し合えたことは、思いやりの心を育てるうえでたいへんよかった。

③ 体験的活動の場

介護の模擬活動を取り入れたことは、介護の大変さを身体で実感でき、それ以後の学習

を深める大きな効果を与えた。その反面、この活動が本当に適切であったか疑問を感じる。たしかに、この活動を取り入れればその大変さは実感できよう。しかし、その大変さだけが大きくクローズアップしてしまい、介護する人・される人どうしの心の通い合いという大切な部分に触れることなく、終わってしまった思いがする。

④ W子の実践記から

W子は、資料5のように「お年寄りに会ったら笑顔で挨拶をしよう。」と自分の目標を掲げた。それから3～4日後の記録が資料7である。ドキドキしながらも挨拶をした後のさわやかな気分を味わったW子は、きっとこれからも、それを実践し続けるにちがいない。

子どもたちが行った福祉の実践は、このようにとても小さなことが多くて、「それが福祉？」と思われるかもしれない。しかし、その過程で子どもたち一人一人が真剣に調べ、考えを深め合ったことは、きっと将来福祉を考えるうえで、大きな力になると期待する。そして、お年寄りはもちろん、だれに対しても思いやりの心が持てる子になってくれたらと願っている。

資料7 W子の小さな実践記の一部

昨日学校の帰り、生協の前の道を歩いていたら向こうからおばあさんが一人スーパーの袋を持って歩いてるのが見えました。この前の社会で決めた「あいさつ」をしなければと思い、そう決めたとき胸がドキドキして、きん張してきました。「今日は」と思い切って言ったら今日は、今日は寒いねえ」とにこにこしながらあいさつをしてくれました。

とてもうれしく思いました。笑顔ではあいさつでできなかったけど、何かとてもさわやかな気分になりました。これからは笑顔であいさつをしていこうと思いました。

(2) 今後の課題

この学習の性格上、子どもたちの病院への聞き取り調査は遠慮した。また各家庭でも公にできないプライバシーの壁があり、なかなか高齢者の生活の実態を知ることは難しかった。今後は、介護する側のホームヘルパーや訪問看護婦、ボランティアの方を招いて、その仕事を通して福祉教育を進めるような指導の工夫も考えていく必要がある。この学習を通して高齢者への思いやりの心を育ててきたが、これを契機に輪を広げ、人間に対して、さらには動植物に対して思いやりの心が育つように、援助・支援していきたい。